

中島敦『南島譚』とその素材としての「土方久功日記」

Atsushi Nakajima's "South Sea Island Tales (南島譚 Nantoutan)" and "Hisakatsu Hijikata's Diary" as its Resources

清水 久夫

Hi sa o SHIMUZU

要 旨

中島敦は、昭和十六年（一九四二）七月、南洋庁内務部地方課国語編集書記として、パラオへ赴任した。土方久功^{ひまかつ}は、昭和四年（一九二九）三月にパラオへ渡って以来、サタウル島で七年余を過ごすなど、十年以上南洋で生活し、敦の赴任時は南洋庁地方課の嘱託であった。敦は、パラオへ赴任して久功と出会い、間もなく、久功と親しくなっており、毎日のように久功の宿舎を訪れるようになり、やがて、久功の日記・草稿を読むことを許されるようになった。中島敦の第二創作集『南島譚』に収められている「雞」「ナポレオン」「寂しい島」「夫婦」の四編の短編小説は、主にそれらから材を得たものである。

小稿では、土方久功が、中島敦にどのような素材を提供したのかを、これまでほとんど利用されなかつた土方久功日記等により、明らかにした。つまり、「雞」は、土方久功日記昭和十七年（一九四二）一月二〇日の項を素材にし、敦自身がサイパン島の公学校で見聞したことを加えて書かれた。「ナポレオン」「寂しい島」は、久功の「南方離島記」の草稿と、その基となった土方久功日記の旅行記を素材にして書かれた。「夫婦」は、久功の著書『パラオの神話伝説』の原稿、著書『パラオ島民の部落組織』および島民ツドンから聞いた話などを素材にして書かれた。

おしるひ

中島敦の第2創作集『南島譚』（今日の問題社）は、死去半月前の昭和十七年（一九四二）十一月一日に刊行された数少ない単行本の一つである。この単行本には、『南島譚』の表題のもとに「幸福」「夫婦」「雑」の3編、『環礁——ミクロネシア巡島記抄』の表題のもとに「寂しい島」「夾竹桃の家の女」「ナポレオン」「真昼」「マリヤン」「風物抄」の6編の短編小説が収められている。⁽¹⁾

『南島譚』が、土方久功ひょうこうの著作などにその材を得ていることは、多くの論者によって指摘されている。⁽²⁾しかし、土方久功が『南島譚』に素材を与えたと指摘されているものの、その具体的内容については、あまり述べられていない。その一因が、それらの論文に用いた資料のほとんどが刊行された文献に限定されているためと考えられる。⁽³⁾

筆者は機会を得、国立民族学博物館に所蔵されている土方久功日記の一部、第一冊から第三二冊までを、国立民族学博物館長・須藤健一氏との共編で刊行した。⁽⁴⁾小稿では、今までほとんど利用されなかった土方久功日記を主な資料として使用し、土方久功日記等が中島敦の『南島譚』にどのような素材を提供したのかについて、「雑」「ナポレオン」「寂しい島」「夫婦」の4つの短編小説を取り上げ論じたい。

一 土方久功との出会い

中島敦がパラオへ着いたのは、昭和十六年（一九四一）七月六日の午前であった。六月二十八日にサイパン丸で横浜港を出港し、サイパン、テ

ニヤン、ヤップの島々に寄港して、コロール港に着いた。その日は日曜日であったが、南洋庁の職員四〜五人が出迎えに来ていた。中島敦は、8年勤めた横浜女学校教諭の職を辞し（当初は休職）、南洋庁内務部地方課国語編集書記としてパラオに赴任したのだった。仕事は、公学校（島民が通う小学校）で使う国語教科書の編集だった。

土方久功(5)は、明治三十三年（一九〇〇）七月東京に生まれ、学習院初等科・中等科を経て東京美術学校彫刻科を卒業し、昭和四年（一九二九）三月、二八歳のとき、パラオへ渡った。パラオで2年半過ごした後、島民三〇〇人の住む絶海の孤島サタワル島で七年余を過ごし、昭和十四年（一九三九）一月、再びパラオへ戻った。敦がパラオへ来たとき、久功は内務部商工課・地方課の嘱託として南洋庁に勤めていた。

敦の名が初めて土方久功日記に見えるのは、パラオ到着十余日後の七月一日であった。この日の日記には、次のように書かれている。

絵画同好会ヲ作ルコトニナツタノデ、今晚南賃デ集ルカラ来テケ
レトノ事。今日ハ中島君「文化協会」が編輯書記ノ中島君「敦」ヲツレ
テクルコトニナツテ居ルノデ断ル。夜、中島君「敦」ハ来ズ。

「中島君「文化協会」とあるのは、南洋群島文化協会の中島幹夫で、当時は月刊誌『南洋群島』の編集長であった。中島幹夫は久功の宿舎に入り浸り、ときには酔って泊まることもあった。中島幹夫は、敦がコロールに来てから直ぐに知合って、久功の宿舎へ連れて来るまでに親しく

なったようだ。

しかし、この日の夜、中島敦は、喘息のため久功の宿舎を訪れることができなかった。敦はその後、アラバケツの南進寮からコロール町の第五合宿官舎に移ったが、七月末から八月の初めにかけて急性大腸カタルに罹り、誰も知人がいなかったため、腹痛と下痢の中、まる三日間炎熱にあえぎながら、飲まず食わずで放置され、それが治らないうちにデング熱に罹ってしまった、三九度の熱で床についた。⁽⁷⁾

次に敦の名が土方久功日記に見えるのは、ひと月後の八月一八日であった。⁽⁸⁾ その日の日記に、「夜、中島君（敦）来ル、Maria 来ル。」と書かれている。

久功は商工課と地方課とを兼務していたので、地方課に来た敦とは直に知合うことになったが、⁽⁹⁾ 久功の宿舎を訪れたのは、この時が初めてと考えられる。この夜は、たまたま Maria（マリヤ）も訪れた。この頃、マリヤはパラオ語、パラオの歌を教えるため、週に数日、久功の宿舎を訪れていた。

中島敦の名が久功の日記にしばしば見られるようになるのは、九月になつてからである。九月九日には、夕食後、パラオ放送局の久保田公平とともに久功の宿舎を訪れ、消燈時間までいた。⁽¹⁰⁾ その翌日には、久功と敦は、東京帝大教授の渡辺信一、久保田等とともに、近くのガルミツ（アールミツ）部落を訪れた。⁽¹¹⁾

その後、敦は病もすっかり癒え、公学校視察のため、九月一五日からトラック（チューク）諸島を中心に、南洋群島を一周する2カ月にわた

る長期の出張の旅に出た。この出張旅行のことを、敦は九月一三日付の父・田人宛の手紙に「実に イヤで イヤで 堪らぬ 官吏生活（蠅を噛むどころではございませぬ。こんなあじきない生活は始めてです）の中で 唯一の 息抜きの出張旅行とて、今は私も多少元気になってはありますが、帰ってからのことを考へると 誠に憂鬱です。この旅行によって自分の（役所の）仕事に対する情熱が新しく湧けば有難いのですが」と書いた。この長い出張旅行では、敦は一等船室をとったので、船賃は三等の3倍だが、食事をはじめ待遇は五倍も十倍もして貰っている、と九月二一日付の妻・たか宛の手紙に書いた。この出張旅行は、敦にとつて満足するものであった。出張から帰って、久しぶりに役所へ出たら、みんなが「大分フツタネ」と言ったという（たか宛二一月五日付手紙）。

敦が長期の出張から飛行機でパラオへ帰って来たのは、一一月五日の午後であった。早速その夜、久功の宿舎を訪れた。⁽¹²⁾ この出張で訪れた南洋諸島は、七カ月前に久功が訪れたところだったので、敦にはすぐにも久功に話したいことが沢山あったのであろう。

翌々日の七日も、敦は久功のもとを訪れたが、⁽¹³⁾ その翌日から一日まで、久功はパラオ本島（バベルダオブ島）へ出張旅行に行った。一三日の夜、敦はパラオ本島から帰ってきたばかりの久功のもとを訪れた。この日の日記には、「夜、市川君が来て話シコンデル所へ中島（敦）君が来て、パラオノ話ヲ求メル。後、Maria、Kodep ヲツレテ九時頃ニナツテ来ル。」と書かれている。この夜も、敦はマリヤに会った。

この頃、敦はパラオの生活にすっかり嫌気がさしてきた。一一月九日

付の妻・たか宛の手紙に、「群島を今迄歩いて見た所では、どうも、僕の喘息には、(全く困ったことに) パラオが一番悪いやうだ。」「オレはもう、すっかり、編纂の仕事に熱が持たなくなつて了つた。」と書いています。

敦は、南洋諸島一周の旅から戻つて間もない一月一七日、第二の旅行に出た。前回の出張旅行で訪れなかつた、比較的パラオから近いヤップ島、ロタ島、サイパン島、テナアン島を巡り、一月一四日、パラオへ帰つてきた。その日の夜、早速、久功の官舎を訪れた。⁽¹⁵⁾二人がパラオのコロールにいるとき、敦は毎晩のように久功を訪れたのである。

昭和一七年(一九四二)一月九日付の妻・たか宛の手紙には、「窓に悪い紙をはりつけて、戸をしめて了へば、明るい電燈もつけられるのだが、内地の冬と違つて、何しろ南洋は暑くて、部屋をしめ切つては、とてもがまん出来ない。つい、部屋をあげつばなしにして、電気を消す、といふことになる。本も読めないの、毎晩土方さんの所へ行つては、無駄話ばかりしてゐる。土方氏は最近独身宿舎を出て、一軒の官舎を持つやうになつたんだ。」と書かれている。

土方久功日記には記されていないが、一月一九日、敦は久功を訪れた。敦の「南洋の日記」⁽¹⁶⁾には、久功の官舎で「南方離島記」の草稿を読んだことが書かれている。この頃になると、久功が敦に、草稿を読ませるまで親密な関係になつていたことがわかる。

敦は、翌二〇日の夜も久功の宿舎を訪れたが、二二日の日曜日に久功の宿舎に熱帯生物研究所の研究員やパラオ放送局の久保田達が集つた「饗宴」にも加わつた。この賑やかな「饗宴」は、阿刀田研二が間もな

く内地へ帰ると、松田の懇請があつたため開かれたものだが、これにはマリヤ達を作つた島民料理が出された。人々は手づかみで食べ、合成酒を飲み、島民の唄を皆で歌つた。⁽¹⁷⁾

翌日の夜も、敦は久功の官舎を訪れた。⁽¹⁸⁾敦の一月二二日の「南洋の日記」には、敦が久功から聞いた興味ある話が記されている。

昨夜も喘息、今日は出勤して見る。夜、又土方氏宅。阿刀田氏、高松氏、

マルキョク・ガラド辺のボラ捕りの話頗る面白し。数多のカヌーを連れ、リーフの程良き所に数十人下り立ちて円陣を作りボラの群を追ひつめる。各人手に鳥を捕ふるが如き網を持ち、(水中を掬ふにあらで) 空中にかざして待構ふ。数人、円陣内に入り鉤を手にボラを追ひまくる。ボラは逃れんとして、水上より二米余も高く跳躍す。そのボラを各、網をもつて空中に捕ふるなり。竿につけし網を以てもなほ捕へ得ずして、頭上を越さるゝことあり。かくして、二尺に余る大ボラ数百尾を忽ちに捕獲す。漁終れば、各、舟に帰り、直ちに歯もて大ボラを噛み裂き、海水にて一寸洗ひてはムシヤ〜と食するなり。

又、リーフの縁にて、大シヤコ貝(アキム)の壘程のものを捕るも愉快なりと。リーフの縁あたりには大シヤコ貝いづれも口をあけて待居るが、その口の中に、丸太をつゝこめば、直ちに貝殻を閉ぢて棒を挟む。その隙間より、用意せる大竹ベラ(にて、)を差入れて、貝柱

を切断すれば、瞬間、巨大なる貝殻が忽ち力を失うて、ガタリと離るゝ由。かくして、見る間に、舟も沈むばかりにアキムを積込むなり。

土方氏によれば、天下の珍味は、海亀の脂に極まる由。パンの実をむしり、之にこの脂をつけて食すれば、飽くるを知らずと。マングロ―プ貝も味よし。亀の卵はいくら熱すると白味固まらず。卵は一ヶ所に二三百箇あり。土民、棒を以て泥地をつきさし、その尖端に黄味のつくを見て其処を掘り卵を取るといふ。島民の雞のしめ方の乱暴なる話。先づ生きながら毛をむしりつくせば、歩くにもヒョロ／＼して歩けぬと。

ここにある、「マルキョク・ガラルド辺のボラ捕りの話」とは、二年前、昭和一四年（一九三九）一〇月一七日から二六日まで、杉浦健一とパラオ本島へ調査旅行に行つたさい、マルキョクで体験したことである。日記二二日の記には、「村ノ者等総ガカリデ（ボラ）漁ニ出タノデ、十時前頃、波止場ニ出テ参加シ、昼頃サキニ帰ツテクル。」と書かれている。

このように、久功は南洋群島で体験した興味深い出来事を敦に話し聞かせたのだった。

その後も、敦は、毎晩のように久功の宿舍へ行っていたが、大晦日を久功達と過ごした。そこでも、敦は、久功の蛸捕りの話を頗る面白く聞いた。⁽²⁰⁾

昭和一七年（一九四二）元日には、敦は役所の式へ出、官舎の食堂で雑煮を食べた後、久功、高松一雄と三人で、アラカベサンの佐伯清の家へ行き、夕食を御馳走になった。⁽²¹⁾

二日は、皆で久功の宿舍で鍋三杯のお汁粉を作り、餅も充分あって、腹一杯食べた。敦は、久功の宿舍に集まる熱帯生物研究所の独身者やパラオ放送局の久保田、山口達と一緒に、楽しい時を過ごした。⁽²²⁾

帰国する二カ月前、昭和一七年（一九四二）一月一七日から、敦は久功と二人でパラオ本島（バベルダオブ島）を一周する二週間の旅をした。敦は前年八月に久功等とともにパラオ本島を一周する旅へ行く予定だったが、デング熱に罹り、この出張旅行を諦めねばならなかった。それだけに、敦は久功との旅を楽しみにしていた。一月一七日付の妻・たか宛の葉書には、「今から出張旅行に出る。今度は土方さんと一緒だから楽しい。大体二週間の予定で、月末に帰つて来る。充分に島民の生活を^{じゆう}見てくる積り。」と書かれている。しかし、出発の前夜、敦は発熱し眠ることができず、出張旅行を止めようと思つたが、帰国が間近で、これがパラオ本島へ行く最後の機会と思ひ、無理して行くことにした。⁽²³⁾

二、「鶏」の成り立ちと「雞」

土方久功の「鶏」が最初に発表されたのは、戦後の昭和三十一年（一九五六）六月に刊行された二番目の詩集『青蜥蜴の夢』（大塔書店）においてであった。ついで、没後の昭和五十七年（一九八二）七月に刊行された『土方久功詩集 青蜥蜴の夢』（草原社）に収められた。その後、平成三

年（一九九一）一月に、三一書房から刊行された『土方久功著作集』第6巻に収められているので、今では容易に入手出来るようになった。

「鶏」は、前半、後半2つの部分に分けられる。前半部は、次のようである。ギラメスブツ爺さんが、何やら分からない病気になった。久功が見舞いに行くと、その爺さんが言う。「もう長いことコロールの病院に通ったがどうしてもよくならない。病院ではもう癒るまいと言われたので、パラオ本島のウギワル村のレンゲ牧師の所に行ったら、レンゲが、病院で診てもらっていた者を、私の方に呼びよせたと言われては誠に困るから、病院に行つて医者に話して、許しを得て来なさい、と言つて帰された。自分としては病院では癒らないと言われたのだから、気休めでもレンゲさんのところに行きたいと思うのだが、お医者様にそんなことを言うのは怖い。何とか行けるようにしてくれないか」というのである。

レンゲとは、久功がパラオへ渡つて間もない頃ドイツから来た新教の宣教師で、ウギワル村に入つて、キリスト教を布教しながら、国から沢山持つて来た薬を島民に施して、着々と島民間に評判を得ていたのだった。

久功は病院長とは特に親しくしていたので、早速行つてその話をする、あれはもう駄目なのだから、思うようにさせてやるがいい、とのことだったので、久功は再び爺さんを訪ねて、ウギワル村に行つて、病院の許しを得て来たと言げるがいい、と言つてやった。

爺さんはウギワル村に行つて間もなく亡くなったが、その後、ある日久功のところに見知らない島民の若者が来て、「私はギラメスブツの使い

の者です。爺さんは亡くなりましたが、亡くなる前に、先生の所に鶏を届けてくれと言つたので持つて来ました」と言う。差し出したバスケットの中には、生きた鶏が窮屈そうに押し込められていた。

ところがその翌日に、また一人の見知らぬ島民が来て、これも一羽の雄鶏を出して、前と同じ口上を述べた。久功は、昨日別の青年から爺さんの贈りものを既にもらつた旨を告げ、持ち帰るように言つたが、青年は爺さんの言う通りにしただけだと言つて、鶏を置いて行つてしまった。さらに一日おいた翌々日、またウギワル村の青年というのが、一羽の生きた鶏を持つて久功の前に現われた。爺さんは、確かな上にも確かであるようにとの心から、二人にも三人にも、それも念をおして言いつけたものとみえる。こんな純粋な気持、こんな一途な気持を島民が持つていたことを知り、敬虔な祈りを祈つたのだった。

これは、『土方久功著作集』第6巻に収められている未発表原稿「トンちゃんとの旅」の一月二〇日の項の一部とほぼ同じである。そして、この原稿の基になっているのが、土方久功日記の一月二〇日の項の一部⁽²⁵⁾である。その部分が「鶏」の前半部になっている。後述するように、敦は、その日記を読んだ。

「鶏」の後半部は、「後日譚」である。ある日友人が一冊の本を持つて来て「君のことが書いてあるよ、まだ読んでなければ上げよう」と言つてその本をくれた。見ると中島敦の「南島譚」で、この鶏話もその中に出ていた。後に未亡人に会つた時、その話をしたら、「敦があればはずか

しいから土方さんにはあげない、と行って、上げなかったのです」といっていた。

これまで多くの論者が、この刊行されている「鶏」の「後日譚」により、『南島譚』と土方久功の関係を語ってきた。

しかし、この、久功が『南島譚』を入手した経緯等には土方久功日記との相違が見られる。かなり長いが、刊行されていない部分なので、日記昭和一九年（一九四四）八月一日の項を引用してみよう。

阿刀田君カラ送ッテ来タ 中島敦ノ「南島譚」ヲ読ム。コレハ私ガボルネオニタツ一寸前ニ出テ居タノダガ、敦ハ一向ソレニ就イテ話サナカッタノデ、私ハ何モ知ラナイデ居タノヲ、今度阿刀田カラ斯ウ云フ本ガ出テ居ルコトヲ聞イテ、早速 中島ノ未亡人ニ一本ヲ乞ウテ置イタ所、折返シ返事ガアツテ、アレハ中島ガ、羞カシイカラ土方サンニハ贈ラナイノダト云ッタノデ、送ラナカッタガ、今ハ本モ手許ニナイ由ヲ答ヘテ来タノデ、先日阿刀田君ニ送ッテ貰ッタノダツタ。

内容ハ六部ニ分レテ居テ最初ノ二部ガ「南島譚」ト「環礁（ミクロネシヤ巡島記）」デ、アトノ四部ハ南洋ニ関係ノナイ小説集デアル。「南島譚」ノ部ハ「幸福」「夫婦」「鶏」ノ三篇デアリ、「環礁」ノ部ハ「寂しい島」「夾竹桃ノ家ノ女」「ナポレオン」「真昼」「マリヤン」ノ五篇ト、今一篇「風物抄」トアツテ、クサイ、ヤルート、ポナベ、トラツク、ロタ、サイパンノ小景ガ各一篇ツツ挙ゲラレテ居ル。

中島ノ未亡人カラ、敦ガ羞シイカラト云ッタト云ッテ来タノニハ微

笑ヲ禁ズルコトガ出来ナイ。今 中島ノコトヲカレコレ思ヒ出シテ書イテミル気ハナイガ、羞シイト云フ語ヲ敦ガソノママ使ツタカドウカワカラナイニシテモ、彼ノ氣持ガ解ルヤウナ氣モスルト全時ニ、如何ニモ中島ラシイガ、私ノヤウナ人間ナラ、ソナナコトヲ考ヘテミルコトモ要ラナイト思フノニ。

ソレハ只、是等ノ小説ノ大部分ガ、私カラ持ッテ行ツタ材料ダカラデモアリ、ソレガ只単ニ私カラ何トモナシニ話シタモノデナクテ、コンナニマトマツタ作品デハナイニシロ、私ガ私ナリニ既ニ書イテアツタモノヲ読マセタノダツタカラ——

ソレモ敦ハコレヲ此ノ様ナ形デ出ス筈デハナカッタノデ——少クトモ「鶏」ハ。

敦ハ公学校ノ教課書マツヲ作ルコトニナツテ居タノデ、教材トシテ鶏ノ話ヲ呉レト云ツテ来タノダツタ。勿論私ハ喜ンデ之ヲ提供シタシ、此ノ「鶏」ノモトモ、ナポレオンモ、自分ノ日記帖ニ事実トシテ書カレテ居ルノヲ読マセタモノデアリ、「寂しい島」ノ中ノH無人島モサウダシ、ソレカラ「マリヤン」ノH氏モ私ダシ、「夫婦」ノ話モ私ノ「パオの神話伝説」中ニアル。併シ私ハコレヲ興味深く、懐シク読ンダ——実ハ此ノ最初ノ二部ダケヲ読ンダノデアル。ソシテ博識ト天分ニ恵マレタ敦ヲ羨ミモシ、彼ノ早逝ヲ今更惜ミモスル。是等ノ材料ガ、コノヤウニ取扱ハレテ居ルコトニモ、小説ノ創作過程ヲ知ラナイ私ニハ、大変ニ面白ク考ヘラレルシ、感心シテシマフ。——實際コニクシクナル。他日、私ノ日記帖ニアル記事モ、何トカシタ形デ発表シテ

ミタイト考へテ居ルノデ、小説家ハ別トシテ、一般読者ハ是等ト両方ヲアハセ読マレタラ、キット私自身ト全ジ興味ヲ感ジテクレルコトドラウ。

土方久功日記のこの引用部分は、『南島譚』の成り立ちを考える上で重要である。久功が材料を提供し、それを使って『南島譚』に収められている「雞」などの短編が書かれたことが、久功自身によつてはつきりと述べられているからである。久功は草稿だけでなく、「自分ノ日記帖ニ事実トシテ書カレテ居ルノヲ読マセタ」のである。

土方久功日記によれば、久功は五月二五日に仙台にいたパラオ熱帯生物研究所の研究員だった阿刀田研二から本『南島譚』が出ていることを教えられ、六月二七日に手紙で中島の未亡人に一本を乞うたところ、七月二日に折り返し返事が来て、中島が、恥ずかしいから土方には贈らないのだと言ったので、送らなかつた。今は、本も手許にない、といった。それで、久功は阿刀田に本を送つてくれるよう頼み、八月一六日に本が届いた、という。久功は本を手に入れるのに、大分手間取っている。

それで、送られてきた『南島譚』を読んだら、「是等ノ小説ノ大部分ガ、私カラ持ッテ行ツタ材料」であることがわかつた。日記では具体的に、この「雞」も、「ナボレオン」も、「寂しい島」の中のH無人島も、それから「マリヤン」の中のH氏も自分で、「夫婦」の話も「パラオの神話伝説」の中にある、と言っている。

ところで、「雞」の後日譚には、「敦の鶏話のマルクツプは、およそこのギラメスブツとは違ふ」と書かれているが、実際の「雞」の主人公ギラメスブツは、どのような人物であつたのか。ギラメスブツが土方久功日記にどのように書かれているか、見てみよう。

日記昭和一四年(一九三九)八月七日の項に次のように書かれている。

今日ハ杉浦君ガアラバケツニ用ガアッテ行ツタ序ニ、アラバケツデ彫物ノ上手ナモノ達ニ何カカニカタノンデ来テクレル。ヒブクリハ蓋ニ彫刻ノアルオルホサカルヲ造ル由。エラマスブドハ鉄木デ、ブツクエンドニナル様ナ人形ヲニツト「神様ノ家」ヲ造ツテクレル由。

8日後の一五日の項には次のように書かれている。

晩、エラマスブドガスバラシイオンレンムルヲモツテ来テクレル。エラマスブドガオヤヂカラ貰ツタノダソウダカラ、相当古イモノダロウ。(エラマスブドハモドロンヨリモ大分年上ダ。)手ハコンデ居ル訳デハナイガ、スツキリシテ居テ、ズツシリシテ居テ、イイ塩梅ニ古ビテ居テ、何トモ云ヘズ懐シイモノダ。一木造リデアル所モ、昔ノ「暇」ナ姿ガ見エテウレシイ。アバイ等ニ集ツタルバク達ニ、イラオトヤ何カトイタノヲ出ス大器ダソウデ、コレカラ更ニコツブ様ノモノニ注イデ飲ムソウナ。

ソレカラ、先達岩山カラ拾ッテ来タ「神ノ家」ハモリ△ゲツトダソ

ウデ、モ少シ幅広デ三ツ窓ノガ本式ダソウダ。(中略) 今度モット立派
 ナノヲエラマスブトガ造ツテケレル由。モドロノニ云ハセルト、エラ
 マスブトハコロルノ「家ノ神」造リダツタソウダカラ、キツト典型
 的ナモノガ出来ルニチガヒナイ。

そして、その3日後の日曜日(二十八日)には、ギラメスブツ(＝エラ
 マスブト)は久功達のワーラップシエールへの調査に同行している。⁽³⁰⁾
 ギラメスブツは、翌週の日曜日にも、久功の調査に同行している。⁽³¹⁾

九月二日の日記には、「夜、エラマスブトガアブク・ラカリスヲ造ッ
 テクル。」と記され、二六日の日記には、「晩、モドロノトエラマスブト
 トヲ呼び、オガル等二色ツケヲサセル。」と記され、翌二七日の日記には、
 「モドロノ、エラマスブト来。オガルニラオクヲ塗ツテケレル。」と記さ
 れている。

名前の表記が、「鶏」では「ギラメスブツ」となっているのに対し、日
 記では「エラマスブド」「エラマスブト」となっているが、名前や地名の
 表記が統一されていないのは、土方久功の日記や著書にしばしばみられ
 ることで、同一人物であることは間違いない。日記からは、「鶏」の冒頭
 部分にある「彫りものが上手で、いつも私の頼む人形や民芸的な木彫り
 の小道具などを、丹念に彫っては持ってきてくれた。」⁽³⁵⁾という記述が正
 しいことが分かる。

そして、翌昭和十五年(一九三〇)四月二日の日記には、⁽³⁶⁾

エラマスブトガ腹ヲ病ンデ病院ニ居リ、ヒドク悪イトノ事ダツタノ
 デ、夜、杉浦君ト見舞ニ行ツテヤル。⁽³⁷⁾

と書かれている。

そして、一月後の五月一日の日記に、次のように書かれている。⁽³⁷⁾

其レカラエラマスブトヲ見舞ツテヤル。オギワルヘ行ツタガ、病院
 カラ中途デ行ツタノデ、Padaleiカラコトワラレタ由、是非オギワル
 へ行キ度イト云フノデ、病院ニ行ツテ西川サンニ逢ツテ話シテ来テヤル。
 松本君ノ所ニ寄ル。一所ニ官房ノ近藤サンノ家ニツレテ行ツテ貰ッ
 テ、モルトロックノ飯面ヲ見セテ貰フ。松本君モ一所ニ、アラバケツ
 ニマハリ、エラマスブトノ所ニ行キ、四時過ギ帰ツテケル。

この日は、朝から杉浦佐助とコロル島のはずれにあるアラバケツに
 調査に行った。その帰りにギラメスブツ(エラマスブト)翁さんを見舞
 ったのである。そこでギラメスブツ(エラマスブト)翁さんの要望を聞
 き、病院の西川に会って、ギラメスブツ(エラマスブト)の要望を伝え
 た。そして再びギラメスブツ(エラマスブト)翁さんを訪れ、オギワル
 へ行く許可が取れた旨伝えた。⁽³⁸⁾

その十日後の二一日の項には、

晩、ア・イバヅールトビルントイラケツノ婆サント呼ンデ飯ヲヤル。

オギワルニ行ッタエラマスプトカラ野鶏ヲトドケテ来ル。

と記されてあるので、「鶏」の「事件」があつたのは、昭和一五年（一九三〇）五月であることが分かる。久功がパラオへ来てからまだ一年二カ月しか経っていない時である。

久功をあれほど感動させた出来事だったが、その時の日記には、ギラメスブツ（エラマスプト）が死去したことも記されず、単に野鶏が届けられたことのみが簡潔に書かれているのが不思議である。

次いで、久功の「鶏」と敦の「雞」を見てみよう。

敦の「雞」が、久功の日記を基にして書かれたのは間違いないが、久功の「鶏」と比べると、その読後感は大きく異なる。

度々引用した土方日記の次の一節の意味を考えてみたい。「ソレモ敦ハコレヲ此ノ様ナ形デ出ス筈デハナカッタノデ——少クトモ「鶏」ハ。敦ハ公学校ノ教課書ヲ作ルコトニナツテ居タノデ、教材トシテ鶏ノ話ヲ呉レト云ツテ来タノダツタ。」

この意味は、敦の「雞」を読めばわかる。まず、「雞」でははじめに、公学校を参観した時の様子が書かれている。ここでは、教師、生徒に対する不信心、不可解さが述べられている。

「雞」では、久功と考えられる人物が一人称で語っていて、久功の体験に基づくようであるが、佐々木充氏が述べているように、公学校を参観した冒頭の部分に限っては、敦自身の体験に基づくものと思われる。

中島敦の「南洋の日記」には、敦が多くの公学校を訪れ、授業を参観している様子が見られるが、サイパンの公学校を訪れたとき、敦は他の公学校を訪れたときには見られない驚きを「南洋の日記」に書いている。それは、次のようである。

午前九時公学校に到り小山田校長と語り、授業を見る。凡て此の学校の軍隊式、形式的訓練の徹底は驚くばかりなり。その可否は未だ言ふべからず。（二月二七日）

校長及訓導の酷烈なる生徒取扱に驚く。（同二八日）

また、サイパン滞在中に書いた妻・たか宛の昭和一六年（一九四一）二月二日付の手紙には、

この公学校の教育は、ずるぶん、ハゲシイ（といふよりヒドイ）教育だ。まるで人間の子をあつかつてゐるとは思へない。何のために、あんなにドナリちらすのか、僕にはわからない。

と書かれている。サイパンの公学校での見聞を基にして、「雞」のこの部分を書いたのである。

ついで、島民への不信心が述べられ、本題であるマルクープの話へ移る。病気となった老人の名は、ギラメスブツからマルブークに替わって

いる。⁽⁴²⁾ここでは、彼を、「とんでもない喰わせもの」と断言する。さらに、彼は「神様事件」（モデクゲイ）の密告者だと言われ、友人まで裏切るような下劣な奴に、私は甚だ不愉快に感じる。それに、この老人に懐中時計を盗まれた。その後、私は長期にわたる「土俗調査」のためパラオを離れ、2年後にパラオへ戻つてくると、一月も経つた頃、ひよっこりマルクープ老人が訪ねてくる。その後は、「鶏」とほぼ同じであるが、三羽の生きた牝雞を前にして、私は少なからず感動した。しかし、私は、これを院長に斡旋した札か、私の時計を盗んだことに対する謝罪のつもりか、と考える。そして最後に、「南海の人間はまだ〜私などにはどれ程も分かつていないのだといふ感を一入深くした⁽⁴³⁾ことであつた。」と結ぶ。なお、ここで「神様事件」（モデクゲイ）について述べられているが、「神様事件」（モデクゲイ）については、日記中に書かれた旅行記に、詳細に書かれている。敦は、日記中の旅行記を読んで、短編小説中の「神様事件」（モデクゲイ）の部分を書いたとみてよからう。

久功の「鶏」からは、ギラメスブツ爺さん、さらには島民に対し、温かなまなざしを感じるのに対し、敦の「雞」からはそのようなものは全く感じられない。これでは、教科書に使えない。

これが、久功の日記に見られる「敦ハ コレヲ此ノ様ナ形デ出ス筈デハナカツタノデ——少クトモ「鶏」ハ。」という言葉になつたのであろう。

三. 「ナポレオン」と「ナポレオン」

久功、敦には、ともに、「ナポレオン」と題する短編がある。まず、久

功の「ナポレオン」から見て行こう。

「ナポレオン」が最初に発表されたのは、昭和三年（一八五六）八月に刊行された2番目の詩集『青蜥蜴の夢』（大塔書店）においてである。次いで、昭和七年（一九八二）七月に刊行された『土方久功詩集 青蜥蜴の夢』（草原社）に収められた。

久功は昭和十四年（一九三九）九月二十九日から一〇月七日まで、国光丸で南方の離島への出張旅行をした。一〇月七日の日記には、⁽⁴⁴⁾

先月二十九日、国光丸ニ乗り、「ソンスル」「メリー」「ブル」「トコベイ」「ヘレン」「メリー」「ソンスル」トマハリ、今日昼帰ツテクル。

と書かれている。

この日記に書かれている南方離島巡りの旅行記は、その後、「南方離島記」と題された草稿に書き改められた。⁽⁴⁵⁾敦の「南洋の日記」には、昭和十六年（一九四一）一二月一九日の夜、この草稿を読んだことが、次のように書かれている。

二日來の喘息、愈々面白からず、夜、土方氏方に到り、南方離島記の草稿を読む、面白し。「プールの島（人口二十に足らず）に、パラオより流刑に会ひし無頼の少年あり、奸譎、傲岸、プールの島民を頗使す、已に半ばパラオ語を忘る。この少年の名をナポレオンといふと」「無人島ヘレン礁に海鳥群れ集へること。島に上れば、たちどころに数十羽

を手掴みにすべしと。卵も又、とり放題。捕りし鳥共の毛をむしり、直ちに焼きて食するなり」

久功の「ナポレオン」の基になったのが、未発表原稿で、『著作集』第6巻に収められている「南方離島記」の一〇月二日の項である。⁽⁴⁶⁾ ナポレオンについては、土方久功日記一〇月二日の記に見られる。日記と「南方離島記」のナポレオンについて書かれた部分を比べると、表記などに多少の差異はあるが、内容にはほとんど異なるところはない。また、「ナポレオン」も「南方離島記」のナポレオンについて書かれている一〇月二日の項と同一である。そのため、『著作集』第6巻には、『土方久功詩集 青蜥蜴の夢』に収められている「ナポレオン」は省かれている。

久功の「ナポレオン」の内容は次のようである。久功達の乗った国光丸は朝六時にブル島近くまで来た。久功達は、ボートで七時半に島に上陸した。九時半にはボートで船に戻ったので、2時間ほどの短い滞在であった。この島には島民が一八、九人しかいなかった。その中に、ただ一人、一三、四歳のナポレオンという名のパラオ人の子供がいた。この少年がこの離島にいる理由が、警察の手にも負えない悪性な窃盗常習のためで、それにより二百哩も離れた離島に流刑に処せられていた。3年の刑期を既に2年近く過している。公学校に4年間通っていたので、日本語が相当出来た筈であるが、日本語がわからない、と言う。

久功がパラオ語で話すと、少年は、はじめはパラオ語で応じるが、じきにこの島のプル語で話す。たった2年の間に、パラオ語を忘れてしま

うのか。「この少年は生れついた悪性が、二年もこのような島に流されて居ても、そして生れて育ったパラオに帰り度い心でいっぱいであっても、一向本心から悔い改めようと努力して居るとは思われないのであって、小さくせに島の大人どもを目下もののように取扱って居るさまが、こにくらしいように有り有りと見え、一点謙譲の心を持っては居ない様子であり、横柄というか、不敵と云うか、何事をもごまかして過ごして行くことにはばかり慣れてしまっているように見えるのであって、聖人でも此の少年を打ち直すことはむずかしいのではあるまいかとさえ思われる。」

しかし、同行の「佐野君がこの少年に二三冊の古雑誌と、やさしい少年向きの絵本とをやると、彼はそれをしっかりと片腕にかかえこんで、何をするにも、それを離そうとはしなかった。」という子供らしい一面を見せたのは、一つの救いである。

そして、久功達は一時間の後に、一八、九人の島民とナポレオンとを見捨ててボートに乗った。ここでは、何の事件も起らず、久功はプル島の島民とナポレオンを淡々と描いている。

では、敦の「ナポレオン」はどうであろうか。右に引用した敦の「南洋の日記」には、久功のところでは、「南方離島記」の草稿を読んだことが書かれているので、敦が、「南方離島記」のナポレオンについて書かれている一〇月二日の項を基に「ナポレオン」を書いたことは間違いないだろう。

敦の短編小説で、「私」とあるのは、久功であり、観察者として登場している。この短編では、警官と巡警がナポレオンの流刑地をS島からT島へ移すことが中心となっている。ナポレオンの経歴、性格は、久功のそれとほぼ同じであるが、敦は少年をより悪質に描いている。そして船がS島を離れようとするとき、ナポレオンが脱走を図る。しかし、巡警らに捕まり、今度は麻縄で両手両足を縛り上げられる。ナポレオンは、ハンガーストライキで抵抗し、丸2日間一度も飲食しなかった。新しい流刑地T島では、上陸後3時間にして早くも子分を作ってしまったようだ。本筋とはあまり関係ないが、S島からT島へ行く途中、船は無人島H礁へ寄る。このH礁はヘレン島のこと、久功達は、一〇月四日昼過ぎに上陸し、2時間余この小さな島に滞在した。その様子は「南方離島記」のその日の項に見られる。⁽⁴⁸⁾

久功の「ナポレオン」では、少年がもらった二三冊の古雑誌と、やさしい少年向きの絵本とを、しっかりと片腕にかかえこんで、それを離そうとはしなかった子供っぽさを描いているのに対し、敦の「ナポレオン」には、そのような子供らしさは全く見られない。「先程警官から聞かされた此の少年のコロールでの残忍な行為も、^(なるほど)成程 この顔ならやりさうだと思はれた。」という文章によく表れている。

敦の「ナポレオン」は、久功の「南方離島記」を素材にして書かれながら、ナポレオンの悪逆性を強調しているのが目立ち、これもまた公学校教科書には使えそうもない。

四 「寂しい島」の成り立ち

既に述べたように、久功は昭和一四年（一九三九）九月二十九日から一〇月七日まで、国光丸で南方の離島への出張旅行をした。一〇月七日の日記には、ソンソル、メリー、ブル、トコベイ、ヘレン、メリー、ソンソルを廻って来たことが記されている。

この日記に書かれている南方離島巡りの旅行記は、その後、「南方離島記」と題された草稿に書き改められた。既に述べたように、敦の「南洋の日記」には、昭和一六年（一九四一）一月一九日の夜、この草稿を読んだことが書かれている。そして、この未発表原稿「南島離島記」は、『著作集』第6巻に収められている。この「南方離島記」の一〇月三日のトコベイ島に上陸した日の記事では、次の文章が印象的である。⁽⁵⁰⁾

八年前に私は此の島を探して来たのであった。パラオから初めて此の離島をまわって来た時、そして此の島にまで来た時に、私は此の美しい、然し本当に取残された様な島と、島人とを見た時、実に謂れない悲しさで胸がふさがったのであった。私は此の島を、これより何うにも動かしたくなかった。変えたくなかった。

この8年前、久功はパラオを離れ、文明に侵されていない離島に移り住む決心をし、それにふさわしい離島を探していた。このトコベイ島もその候補になっていたのである。しかし、この島には既にキリスト教（カトリック）が入り込んでいたため、久功は移住を断念した。久功は、離

島記に「此の時、既にスペイン坊主が、遠くこの離れ島に入つて来て、島人等をかきまわしていたのであった。(中略)あの時スペイン坊主が入つて居なかつたならば、私は今のようには決して居なかつたであろう。」⁽⁵¹⁾と書いている。そのようなこともあり、久功には、この島に対する特別な思いがあつたのである。

それでは、敦の「寂しい島」と「南方離島記」により、トコベイ島をみてみよう。

島の中央にタロ芋田が整然と作られ、その周囲をタコの樹などの雑木林が取囲み、その外側に椰子林が続いている。島の人口は、「寂しい島」では、「人口百七十八人」、「南方離島記」では、「人口二百人足らず」となっている。また、島では子供が生まれず、5歳ほどになる子供が唯一であつた。

この島の将来について、敦は、「恐らく、神が此の島の人間を滅ぼさうと決意したからでもあらう。」と書き、久功は、「私は本当に此の悲しい島と島人が、此の儘絶滅しても、これより少しでも手を加えて、無益な現象を此の島と島人とに起こさせ度くなかつた。」⁽⁵²⁾と書き、ともに、この先、この島が減ぶであろう、と述べている。敦の「寂しい島」が、トコベイ島について書かれていることは明らかであろう。

敦は、多くの離島を廻つたが、いずれも公学校のある、比較的人口の多い島である。敦は公学校のないトコベイ島へは行っていない。敦は、久功の「南方離島記」を素材にして「寂しい島」を書いたのである。しかし、その中に、敦自身が体験したことが含まれていると考えられる。

小さな無数の蟹が走り去るのを見たことである。「初めてパラオ本島のガラルド海岸で之を見た時、一つ一つの蟹の形は見えずに、唯、自分の周囲の砂がチラ／＼チラ／＼と崩れ流れて走るやうな気がして……」⁽⁵³⁾というのは、久功と二人でパラオ本島一周の旅をした時のことであろう。二人は一月二五日にガラルドを訪れているが、敦は、この時、同種の蟹を見たのではなからうか。

「寂しい島」の最後の一行、「何か、荒々しい悲しみに似たものが、ふつと、心の底から湧上つて来るやうであつた。」は、久功の思いを表わしたものである。敦のこの短編小説は、久功のトコベイ島に対する深い思いを、敦が久功に代わつて表現しているようである。

ただ一つ理解できないのが、久功が先に引用した昭和十九年(一九四四)八月一八日の日記に、「寂しい島」の中ノH無人島モサウダシ……と書いているところである。久功は、トコベイ島とヘレン無人島を取り違えている。久功がこの日記を書いたのは、土田村へ引越す直前の混乱の中であつた。そういう状況で、久功はトコベイ島とヘレン無人島を取り違えたのであろう。

五. 「夫婦」の成り立ち

先に引用した土方久功日記昭和十九年(一九四四)八月一八日の項に、「夫婦」ノ話モ私ノ「パラオの神話伝説」中ニアル、と記されているので、ここでは、敦の短編小説「夫婦」について考えたい。「夫婦」の内容は次のようである。

パラオ本島にあるガクラオ部落にギラ・コシサンという男とその妻エビルがいた。エビルは浮気者で、部落の者といつも浮名を流し、夫を悲しませていた。しかも、エビルは大の嫉妬家で、村の女は、人妻だろが娘だろうが、疑いを持った女を、優れた腕力で丸裸にして引き剥いでしまった。当時、ヘルリスと呼ばれた女どうしの闘いである。あるとき、グレパン部落からリメイという非常な美人がガクラオ部落のア・バイにモゴルにやって来た。そして、ギラ・コシサンはリメイと恋仲になった。

それを知った妻のエビルは、リメイに対し、ヘルリス（恋喧嘩）を仕掛けたが、リメイの逆襲に遭い、惨敗した。敗北したエビルは、二日二晩口惜し泣きに泣き続けたが、三日目には、嫉妬と憤怒とが、夫ギラ・コシサンに向って炸裂した。

そこでギラ・コシサンは、妻の機嫌をとるため、自らカヤンガル島に渡り、その地の名産たるタマナ樹で豪華な舞舞台（オイラオル）を作らせ、それを持ち帰った上で、その披露方々、二人の夫婦固めの式を行うことにした。

一月の後、ギラ・コシサンは莫大な珠貨（ウドウド）を職人達に支払い、新しい見事な舞舞台を舟に積んで、ガクラオ部落に帰った。夜になつていたが、舞舞台は舟に残したまま我が家へ帰り、そつと中を覗くと、妻エビルは別の男と居た。そこでギラ・コシサンは、ア・バイへ行つた。そこにはリメイが一人で居た。リメイと話合つた結果、舞舞台を積んだ小舟に二人で乗り、リメイの故郷アルモノグイに向つた。その村で舞舞台を披露し、盛大な夫婦固めの式を挙げた。

一方、それを知つた妻のエビルは、悔しさに泣き叫んだが、あきらめ、ギラ・コシサンの妻になる以前に大変懇ろであつた、村で二番目の物持ちである中年男と結ばれた。中年男は最近妻に死なれたばかりだつた。そして、二組の夫婦は、それぞれ別々にはあるが、幸福な後半生を送つたと、村人達は語り伝えている。

そして、最後に、モゴルとヘルリスの説明がなされている。

『著作集』第3巻『パラオの神話と伝説』には、短編小説「夫婦」の基になつたと考えられる説話が収められている。⁽⁵⁴⁾これは、アバイの絵を説明したところである。以下、やや長いが、引用する。

4 はギルホシサンと彼の妻の話。

ガクラオ村のギルホシサンと云う男はガツツボン村の女と結婚していたが、或る時アルモノグイのグレパン村からモゴル（娼婦のようなもの——説明を略す）が来た時、彼の相手になつたモゴルの所に泊りこんで永いこと家に帰らなかつたので、妻の嫉妬は極頂に達した。それで彼は妻に、カヤンガル島に行つて舞舞台を注文して来て、夫婦祝をするからと云つてなだめたので、妻はすっかり機嫌をなおした。

ところがギルホシサンがカヤンガルから帰つてくると又々妻の嫉妬が昂じて泣いたり蹴つたりするので、彼は家を出てバイに行つてみると、グレパンの女モゴルが一人で寝ていたの、ゆりおこすと、女が怒つて云つた。「誰ですか、この寝莫産はギルホシサンの莫産ですから

ね、他の人は私をおこしたりしてはいけません。」そこで彼は大変気持をよくして、彼こそ、そのギルホシサンであることを告げ、女に次の十五夜の日グレバンに踊舞台をもって行くからと約束して、女を帰してやった。そして彼はカヤンガルに行つて踊舞台を買い取つて来ると、ガクラオには帰らないで、約束の日グレバンに舟をまわして女を尋ね、その女と夫婦になつて盛な夫婦祝をした。

ほぼ同じ内容の説話が、『著作集』第1巻『パラオの社会と生活』に収められている「パラオ島民の部落組織」にも掲載されている。⁽⁵⁵⁾以下、引用したい。

二、ンケクラオ部落のギラ・ホシサン Ngrahosiang はガルツマオのガツッボン Ngathoug 部落の女と結婚したが、グレバン Ngulebang 部落の女がモゴルに来た時、一ヶ月も家に帰らなかったため、妻の嫉妬は極頂に達した。そこでギラ・ホシサンは妻に、ンヘヤンガルに行つてオイラオル Oilaol (踊舞台) を買って来てムル Mur (夫婦祝) をするからと云つて宥めたので、妻もすっかり機嫌をなおした。所がギラ・ホシサンがンヘヤンガルに行つて、オイラオルを注文して帰つて来ると、妻は又々嫉妬が昂じて、泣いたり蹴つたりするので、家を出てバイに行つてみると、前のグレバンの女が一人で寝ているので、体にさわると、女はギラ・ホシサンとは知らないで「私はギラ・ホシサンのメゲレゲルだから他の人とは寝ません」と答えたので、男は大

変気持をよくして、女に、今度の十五夜の日ガラムヌグイにオイラオルを持ってゆくからと約束して、女を帰してやった。そして自分はンヘヤンガルに行つてオイラオルを持って来ると、ンケクラオには帰らないで、反対にガラムヌグイに舟を廻して、前の女を尋ねて夫婦になつて、盛なムル祝をした。

この二つの説話を、敦の「夫婦」と比べると、説話では男の名がギルホシサン、ギラ・ホシサンとなつているのに対し、「夫婦」では、ギラ・ホシサンとなつていて、少し表記が異なつていただけで、同一人物と見られる。また、説話では、「ンケクラオ」(ガクラオ)の部落名、「ンヘヤンガル」(カヤンガル)の島名が、パラオ語の表記で若干異なつているが、他は、地名も、グレバン部落等ではほぼ一致している。「夫婦」の後半のストーリーも『パラオの神話と伝説』とほぼ同じである。

また、先に引用した「パラオ島民の部落組織」の一項、「モゴル及びプロロブル」には、先に引用した説話の前に、「夫婦」の素材となつたと思われるモゴルの説明がある。以下、引用したい。⁽⁵⁶⁾

一体此のモゴルのことは独領時にきびしく禁じたので全然其の風を絶つてしまつて居る為、其の日常生活の模様を委しく知る由もないが、現在考婆達に聞いてみると、女と云う女で一度も此のモゴルにならなかつたものはないようで、女は結婚前に於て必ず一度は此のモゴルになつたものの如くであるけれども、私の考えでは、是もまたパラ

才珠貨ウドウドの影響であつて、当初は誰でもが皆モゴルになつた訳ではなからうと思われる。それは兎も角、モゴルと云うのは可婚の女が男組合のバイに泊り込んで炊事其他の細々した仕事をするのである。
(以下略)

とある。敦の短編小説「夫婦」の末尾に近い部分には、

此処(31)に出て来るモゴル即ち未婚女の男性への奉仕といふ習慣は、
独逸(ドイツ)領時代に入ると共に禁絶されて了ひ、現在のパラオ諸島には其の跡を留めてゐない。しかし、村々の老婆に尋ねて見ると、彼女等は
いづれも若い頃その経験をもつたことである。嫁入前には誰しも
必ず一度は他村へモゴルに行つたものだといふ。

と書かれている。

また、『パラオの神話と伝説』の「附録」として書かれた「ア・バイ」の項では、モゴルについて、より詳しく書かれている。⁽⁵⁷⁾

岡谷氏が述べているように、⁽⁵⁸⁾『パラオの神話伝説』は、久功と敦が帰国した年の昭和一七年(一九四二)一月に大和書房より刊行されたので、敦が久功の宿舍に入り浸っていた頃は、既に原稿はほぼ出来上がつていたと思われるので、敦がその原稿を見たと考えてよからう。

また、久功の『著作集』第1巻に収められている『パラオ島民の部落組織』は、敦がパラオに住んでいた昭和一六年(一九四一)九月に南洋

群島文化協会から刊行されていて、土方久功日記には、久功が敦に謹呈していることが見える。⁽⁵⁹⁾ 敦はこれを手にして読んだことは間違ひなからう。

このように、「夫婦」の後半部は久功の著書および原稿に素材を得ていることが分かる。

ところで、前半部はどうであろうか。安川定男氏は、久功の「未発表の遺稿、旅日記」を読み、中島敦が島民からヘルリスのことを聞いたと思われると述べている。⁽⁶⁰⁾ 久功と敦は、パラオ本島一周の旅の途中、ウリマンに泊まった。そこへ、一月三日の朝ツドンが来た。「トンちゃんとの旅」には、次のように書かれている。⁽⁶¹⁾

ツドンが来ておじやを作ってくれ、ながいこと喋りこんでいる。よばいの話、結婚申込みの話、ヘルリス恋喧嘩の話、首くくり、飛びおり自殺のこと……。

ツドンは、ウリマンの村吏事務所のボーイで、久功とは子供の頃から知り合いであった。村吏事務所のボーイをしていたので、日本語もかなり話せた筈である。恐らく、ツドンは日本語で話し、敦は、ヘルリス恋喧嘩の話をも島民ツドンから直接聞いたのである。ここでは「夫婦」の「素材」が話されたのであろう。敦は、この話に強い印象を受けたと思われる。「夫婦」では、二人が住んでいたのは、ガクラオ部落とされているが、そこは敦と久功が泊まったウリマン部落のすぐ南にあった。また、

「夫婦」の末尾に近いところにある、「昔、大変古い昔、此の村の或る男が、村一番の丈高い椰子の樹に駆け上り、其の天辺から村中の人々に呼び掛けて地上へ飛び降りた話も、ツドンの話「飛びおり自殺のこと」が素材になっていたのであろう。

「ヘルリス」に関する記述が「サテワヌ島における結婚・離婚・姦通」に見られると、浦田義和氏が指摘している。⁽⁶³⁾ここで、久功はヘルリスについて、サタワル島との比較で、次のように述べている。⁽⁶⁴⁾

パラオ島では三角関係が起った場合、女同志が素手で徹底的に喧嘩をするヘルリスと云われる特習があり、このヘルリスには男女とも決して手出ししないで、当人同志だけで最後まで争わせるのだが。

なお、主人公の妻の名「エビル」は、本島のガラルツのアガラップ部落にある巨大な一対の自然石の一つで、女神だと言われる。エビルは多少敬意のある女名である。⁽⁶⁵⁾この女神の名からとったのであるうか。あるいは、英語の「eve」＝災い、害悪、罪悪からとったのであろうか。

この短編「夫婦」では、久功の著書、原稿だけでなく、島民ツドンから聞いた話も素材になっている。その点で、「夫婦」は他の3つの短編小説とは異なっている。この短編も公学校の教科書としては使えそうもない。

むすび

これまで、中島敦『南島譚』に収められている「雞」「ナポレオン」「寂

しい島」「夫婦」の4つの短編をとりあげ、主に土方久功日記との関係について考えてきた。それから分かったことは、次のことである。

- (1) 土方久功の「鶏」は、『土方久功著作集』第6巻に収められている未発表原稿「トンちゃんとの旅」の一部であるが、その原稿の基になっているのが、土方久功日記の昭和十七年（一九四二）一月二〇日の項である。中島敦は、土方久功日記を素材にし、それに自身がサイパン島の公学校で見聞したことを加えて、「雞」を書いた。

- (2) 土方久功の「ナポレオン」は、「南方離島記」と題された草稿の一部であるが、その基となっているのが、土方久功日記に書かれた旅行記である。中島敦は、「南方離島記」と土方久功日記の両方を素材にして「ナポレオン」を書いた。

- (3) 中島敦の「寂しい島」は、土方久功の「南方離島記」および土方久功日記に書かれた、トコベイ島を訪れたときの旅行記を素材にして書かれている。

- (4) 中島敦の「夫婦」は、土方久功の『パラオの神話伝説』の原稿と著書『パラオ島民の部落組織』および島民ツドンから聞いた話などを素材にして書かれている。

以上、中島敦の4つの短編小説が、主に土方久功日記、草稿、土方久功の著作（原稿を含む）を素材にしていることが明らかになった。

土方久功が後の日記に、「是等ノ小説ノ大部分ガ、私カラ持ッテ行ッタ

材料」だと記したことと一致する。

そして、最後に、中島敦が、土方久功から得た素材をもとに『南島譚』に収められた短編小説を書いたにもかかわらず、その著書を土方久功に贈らなかった理由を考えたい。すでに引用した土方久功日記に、「中島が、羞カシイカラ土方サンニハ贈ラナイノダト云ツタノデ、送ラナカタ」と未亡人が答えた、と記されている。

岡谷公二氏は、「久功の詩集『青蜥蜴の夢』に収められている「ナポレオン」と「鷄」を、敦の同名の短編と読みくらべてみると、敦の感じた恥しさがよくわかる。これは、久功のものの方がすぐれている、ということの意味するものではない。いや、文章といい、結構といい、鋭い観察眼といい、敦の作品の方がずっと読者を惹きつけるものをもっている。それにもかかわらず、久功の文章に滲んでいる南洋体験の深さは、敦にはどうしようもないものだ。自分の体験の腰のきまらなさを思い合わせる時、敦には、久功の眼を怖れるだけのものがたしかにあったのである。」と述べている。⁽⁶⁶⁾しかし、理由はそれだけであろうか。

敦は、久功に、島民が学ぶ公学校で使用する教科書を作るので、その教材として「鷄」「ナポレオン」などの「モト」を求めた。にもかかわらず、出来上がった短編小説は、いずれも教科書に載せられるようなものではなかった。それで、敦が、「羞カシイカラ土方サンニハ贈ラナイ」と言ったのではなからうか。それに対し久功は、「微笑ヲ禁ズルコトガ出来ナイ。」彼ノ氣持ガ解ルヤウナ氣モスルト全時ニ、如何ニモ中島ラシイ」と日記に書いている。

岡谷氏が、「敦の羞恥の根にあるのは、南洋在住十三年の久功の眼に対する怖れであろうが、たしかにそこには、教材としてもらってきたものを小説に仕立ててしまったことへのやましさもまじっていたにちがいない。」⁽⁶⁷⁾と述べているように、「やましき」があったからであろう。

つまり、敦は、公学校の教科書を作るための教材として久功に「素材」を求めたにもかかわらず、その短編小説のほとんどが教科書に使用できないものであったために、「羞カシイ」ので、『南島譚』を久功に贈らなかったであろう、と考えたい。

【註】

- (1) 『南島譚』には他に、南洋と関わりのない「悟浄出世」「悟浄歎異」「盈虚」「牛人」「かめれおん日記」「狼疾記」が収められている。
- (2) 佐々木充氏『近代文学資料1・中島敦』(桜楓社、一九六八年三月)、同氏『中島敦の文学』(桜楓社、一九七三年六月)、濱川勝彦氏『南島譚』の世界』(『中島敦の作品研究』、明治書院、一九七六年九月)、安川定男氏「土方久功と中島敦」(『同時代』34号、一九七九年八月)、浦田義和氏『近代文学と「南」』(ロマン書房本社、一九九二年一〇月)、岡谷公二氏『南海漂泊』(河出書房新社、一九九〇年八月) 167・168頁、同氏『南海漂泊』(富山房インターナショナル、二〇〇七年一月) 180頁、川村湊氏「解題」(『中島敦全集』第1巻、筑摩書房、二〇〇一年一〇月)、閻瑜氏「中島敦の南洋作品の形成における土方久功の影響」(『国際日本学』第12号、二〇一五年一月)、杉岡歩美氏『中島敦と「南洋」』(翰林書房、二〇一六年一月)。
- (3) 管見の限りでは、未刊行の資料を用いた論考は、安川定男氏、前掲、「土方久功と中島敦」、岡谷氏、前掲、『南海漂泊』、『南海漂蕩』のみである。
- (4) 『国立民族学博物館調査報告』89・94・100・108・124(二〇一〇年二月〜二〇一四年十二月)
- (5) 土方久功の経歴等については、拙著『土方久功正伝―日本のゴーギャンと呼ばれた男』(東宣出版、二〇一六年二月)を参照されたい。
- (6) 国立民族学博物館刊『土方久功日記』V、367頁。以下、刊本『日記』と略す。なお『日記』からの引用のさい、人名など一般に使用されていない文字を通常使用される文字に改めた。
- (7) 中島敦、一九四一年八月二五日、川口直江宛手紙。中島敦の書簡は『中島敦全集』第3巻(筑摩書房、2002年二月)による。
- (8) 刊本『日記』V、374頁
- (9) 土方久功「パラオでのトンと私」(『土方久功著作集』第6巻、三一書房、一九九二年一月、所収)、329頁。以下、『著作集』と略す。
- (10) 刊本『日記』V、377頁
- (11) 同右
- (12) 同右、393頁
- (13) 同右、398頁
- (14) 同右、401頁
- (15) 同右、410頁
- (16) 「南洋の日記」は、『中島敦全集』第3巻(筑摩書房、二〇〇二年二月)による。
- (17) 中島敦、前掲、「南洋の日記」および刊本『日記』V、411頁
- (18) 同右
- (19) 刊本『日記』V、129頁
- (20) 中島敦、「南洋の日記」一月一日
- (21) 刊本『日記』V、415頁
- (22) 同右
- (23) この旅行については、土方久功の未発表原稿「トンちゃんとの旅」(『著作集』第6巻)、中島敦、前掲、「南洋の日記」に記されている。なお、拙稿第29冊「解説」(刊本『日記』V、339頁)を参照されたい。
- (24) 『著作集』第6巻、353〜355頁。なお、この一月二〇日の項は、「敦ちゃんとの旅(抄)」(前掲『同時代』34号、86・87頁)にも掲載されている。
- (25) 刊本『日記』V、442・443頁
- (26) 国立民族学博物館所蔵、土方久功日記第39冊21〜23頁
- (27) 同38・39冊

- (28) 刊本『日記』Ⅲ、82・83頁
- (29) 同右、84頁
- (30) 同右、85～90頁
- (31) 同右、91頁
- (32) 同右、98頁
- (33) 同右、103頁
- (34) 同右、105頁
- (35) 『著作集』第6巻73頁
- (36) 刊本『日記』Ⅲ、256頁
- (37) 同右、269・270頁
- (38) 同右、279頁
- (39) 佐々木氏は、この「雞」の素材は、土方氏の日記である、と述べ（前掲、『中島敦の文学』、164頁）、岡谷氏は、「幸福」「夫婦」「鶏」「寂しい島」「ナボレオン」の五篇は、あきらかに久功から材を得たものであり、とくに後の三篇は、久功の日記にほぼ同一の話が記されている。」と述べている（前掲、『南海漂泊』168頁）。
- (40) 「開巻冒頭の一節は、公学校を見学した「私」が、その教師の原住民の子供たちへの教育の仕方が、いかにも厳しいことに驚くとともに、教師の方もその私の心を察してか、こうやらないと教育効果があがらぬという、そういった光景が描かれていて導入部分を作っているのだが、教科書編集書記として行った中島自身の体験を基盤とした部分はここだけであろう。」（前掲、『中島敦の文学』263頁）。
- (41) 「雞」の下書き（『中島敦全集』第3巻、筑摩書房、二〇〇二年二月）、ノート第五）では、「ボナベ」島」の或る公学校（南洋群島島民のための小学校を公学校といふ）を參觀した時のこと」とあるが、『南島譚』の「雞」では、「或る島の公学校」としている。
- (42) マルクップ（マルクープ）の名は、土方久功日記昭和五年（一九三〇）九月一日、一〇月五日、一二日の項に見られる（刊本『日記』Ⅲ、338、343、344頁）。この日記が書かれたのは、久功達が離島カヤンガル島に滞在していたときで、マルクップはその島の住民であった。久功は、「鶏」の後日譚で、「敦の鶏話のマルクップは、およそそのギラメスブツとは違う」（『著作集』第6巻、75頁）と述べている。敦の短編のマルクップは、ただ単に名前を借りたに過ぎないと思われる。
- (43) 刊本『日記』Ⅴ、447～449頁
- (44) 刊本『日記』Ⅴ、115頁
- (45) この未発表の旅行記は、「南方離島記」と題され、『著作集』第6巻に収められている。久功の日記には、一〇月一〇日（刊本『日記』Ⅴ、116頁）から十一月四日（同、145頁）までの間に、旅行記が分断されて記載されている。「南方離島記」は、この旅行記を基に書かれたものであるが、日記一〇月六日の後半部分（同、141～145頁）が収められていない。この部分は、南方離島の実情が語られていて注目すべきところである。内容は、1、国光丸船長への批判、2、南洋拓殖株式会社への批判、3、スペイン人布教師への批判、の3項である。その批判は具体的で鋭い。南洋での生活が長く、離島の現状をよく理解している久功だからこそないうる批判である。しかし、公表することを前提に書き改められた「南方離島記」では、その批判があまりに生々しかったので、久功が削除したのである（拙稿、第26冊解説、刊本『日記』Ⅴ、69頁）。
- (46) 『著作集』第6巻、275～280頁
- (47) 刊本『日記』Ⅴ、123～125頁、130頁
- (48) 『著作集』第6巻、284～286頁
- (49) 刊本『日記』Ⅴ、115頁
- (50) 『著作集』第6巻、281頁

- (51) 同右、282頁
- (52) 同右、281頁
- (53) 前掲、「トンちゃんとの旅」、「南洋の日記」
- (54) 『著作集』第3巻、232・233頁。なお、昭和一七年（一九四二）一月に大和書房から刊行されたさい、書名は『パラオの神話伝説』であったが、『著作集』第3巻として刊行されたさいに、書名を『パラオの神話と伝説』と改めた。
- (55) 『著作集』第1巻、148頁。初出は、『パラオ島民の部落組織』（南洋群島文化協会、一九四一年九月）
- (56) 『著作集』第1巻、146頁
- (57) 『著作集』第3巻、210〜214頁
- (58) 岡谷氏は、「夫婦」の話は、久功の著書『パラオの神話と伝説』の中に原型があり、本の出版はこの短編の執筆後だけれども、敦はコロールの久功の家で、この本を原稿の段階で読んだと思われる。」（前掲、『南海漂蕩』180頁）と述べている。
- (59) 刊本『日記』V、424頁
- (60) 前掲、「土方久功と中島敦」150頁。なお、ここで安川氏が見たこの未発表の遺稿は、後に、「トンちゃんとの旅」と題され、『著作集』第6巻に収められた。
- (61) 「トンちゃんとの旅」（『著作集』第6巻）367頁。なお、『著作集』第6巻には、「ヘリルス」と記されているが、これは間違いで、「ヘルリス」が正しいので、改めた。『著作集』に掲載する際、誤ったものである。「未発表の遺稿、旅日記」を読んだ安川定男氏の引用文（同氏、前掲、150頁）では、「ヘルリス恋喧嘩の話」と書かれているので、元原稿には「ヘルリス」となっていたのは間違いなからう。
- (62) 『季刊人間研究』4号（一九五二年一月）。後、前掲、『同時代』第34号、

『著作集』第4巻に収載。

- (63) 前掲、『近代文学と〈南〉』120頁
- (64) 『著作集』第4巻、161頁。なお引用文では、「ヘリルス」とあるのを「ヘルリス」と改めた。
- (65) 『著作集』第2巻、59頁、および刊本『日記』Ⅲ、128頁
- (66) 前掲、『南海漂泊』168頁
- (67) 前掲、『南海漂蕩』181・182頁

〈付記〉

脱稿後、橋本正志氏が著書『中島敦の〈南洋行〉に関する研究』（二〇一六年九月、おうふう）で、中島敦の『南島譚』について考察していることを知った。それにより、小稿に、加筆、修正すべきところがあったが、訂正することができなかった。著者のご寛恕をたまわりたい。